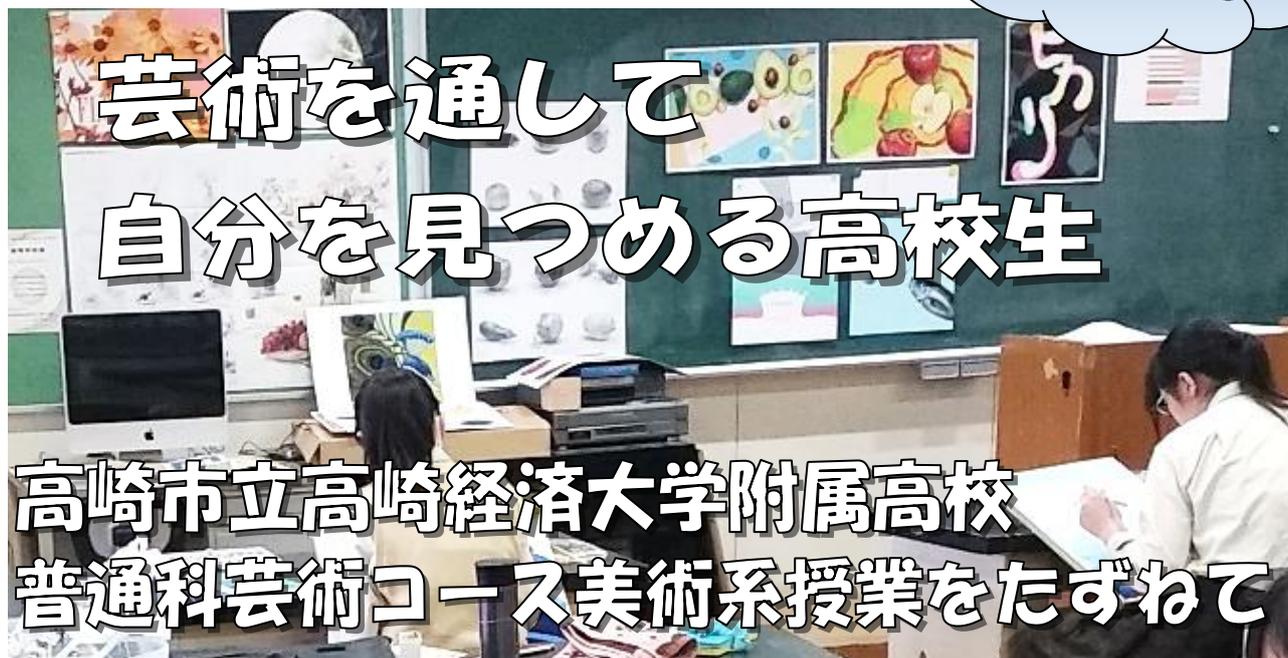


さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題をふだん着のままで紹介するシリーズ

すなっぴ



今、高校の美術授業はどのように行われているのだろう？

こんな疑問を胸にいだきながら高崎市立高崎経済大学附属高校（高崎市浜川町 1650-1：浜川運動公園に隣接：生徒数 840 の普通科の高校／以下、高経附）を訪問しました。

高校では、各学校の教育方針に応じて教育課程が編成されています。文科系、理科系への大学進学を目指す生徒の多い学校では音楽、美術、書道などの芸術系科目の履修時間数は各学年で2時間程度を超えません。群馬県内で例外とも言えるのが芸術科をもつ西邑楽高校と普通科芸術コースをもつ高経附です。今回訪問した高経附では、各学年で音楽系と美術系の授業が6～10時間もうけられていました。そのうち、美術大進学を目指す生徒たちが取り組む3年生対象の二つの授業を取材させていただきました。担当の豊嶋先生による寄稿を交えてレポートします。

展示された作品は高校生の水準を超えている



玄関を入ると絵画や書作品が展示されているピロティーが広がります。その一角では先生と生徒による面談が行われていました。須永智校長先生によると、2学期に入って、学校生活になじんだ一年生、課題が見えてきた生徒たちに対してきめ細かな面談が行われているとのこと。いじめ防止にも面談が有効に機能すると語っていました。

私たちの目をひきつけたのは卒業生や在校生による油絵作品や彫像でした。写實的に描かれた人物像や彫像は高校生離れしていて素晴らしい。いずれもコンクールで優秀な作品として評価されたものだとのことでした。

「ビジュアルデザイン」授業

私たちが訪問した9月24日(木)5、6時間目には豊嶋康男先生による「ビジュアルデザイン」と松本聡子先生による「彫刻」の授業が同時に展開されていました。いずれも3年生。

「ビジュアルデザイン」では、与えられた課題にしたがって生徒たちが画用紙に文字と果物、魚、花などを組み合わせてイメージを表現する「平面構成」に取り組んでいました。与えられた課題とは

次のA群、B群からそれぞれ1つを選び、その2つを組み合わせる平面構成しなさい。

A群；浮、乱、固、緊、動

B群；炎、水、風、光、氷

というもの。

課題は与えられていますが、どんなイメージを描くかは一人ひとりが考えなければなりません。作業がかなり進んでいる人もあればじっくりと構想を練っているという様子の人もいました。先生はわずかなアドバイスしかしていなかったため、作品が完成するまでのプロセスを聞いてみました。

「まず、平面を直線と曲線で分割する課題があり、そこに立体を配置する(例えばりんご…皮がむいてあったり、切ってあったり)。次に配色。色をぬる。こうした工程を経るためには技術と豊かな発想が要求されます」とのことでした。技術とは細部を丁寧に描く技術、色と色との境界を直線で塗り分ける技術、絵具を混ぜ合わせて新たな色を作る技術、陰影をつける技術、果物や花などを写実的に描く技術、物の形や立体感を正確に表現する技術などを言います。それらを習得するための絵画、素描、彫刻などの授業が設定されているそうです。

生徒はこんな作品を描いています

さまざまな技術を駆使して生徒はこんなふうには描いていました。どんなテーマの組み合わせかわかるでしょうか？

「水」の表情を豊かに表現するにはどうすれ

ばよいのか、「浮」のイメージをリアルに表現するにはどうすればよいのか、という点について、豊嶋先生と生徒の間で細かなやり取りが展開されていた作品がこれです。



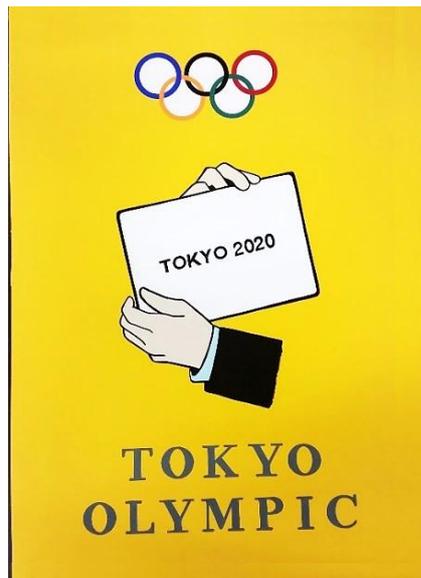
こちらは「固」と「氷」。氷の冷たさが伝わってくる作品ですが、氷の質感や透明感を表現するのが難しいと生徒は語っていました。全体が青の色調で塗られています。



これまでの授業作品から

また、良い作品を生むためには良い作品を見せることも大切だとも言います。教室や準備室の壁面にはプロの作品が貼られていましたが、卒業生のものを含むこれまでのビジュアルデザイン授業での生徒作品もまた「良い作品」です。デザインの独創性や技術の高さに目をみはりません。実際に見せていただいた卒業生の作品の中にひと際色彩、技術とも優れたものがありました。オリンピックのエンブレムに採用されてもよいと思うような作品で(次ページ図版下段右端)、画面全体に広がる黄色に塗りむらがないのです。先生にその訳をたずねると「きれいな画面を作りたい生徒は混色をしないで、画材屋で微妙な色の絵具を購入してくる」とのことでした。今はたくさん色が製品として売られているので経済的に余裕があれば欲しい色は手に入るそうです。

手順を追って、基礎からしっかりと鍛えられていくこと、充実した教室など、いろいろな面で恵まれた環境の中で、美術に没頭する生徒をみてうらやましく思いました。



高校生の美術（デザイン）の授業について

高崎経済大学附属高校ビジュアルデザイン授業担当：豊嶋 康男

高崎経済大学附属高校（以下高経附）に非常勤講師として勤務して2年半くらいになります。高校生を相手に授業を行うのは、私が美術予備校で教えていたとき以来しばらくぶりでした。当時とは様変わりしていて、試行錯誤しながら授業に臨んでいます。芸術コースということで美術の力をみとめられ入学して来た生徒たちは、普通高校よりもかなり多くの時間を美術の授業に充てられていて、美術に対する力を付けて行くことが出来ます。そんな中で1クラス20人余りの生徒が、美術（素描、絵画、彫塑、デザインなど）を学んでいます。

ベーシックなデザイン（美術）の授業と高校生

【デザインとは】 デザインは、人間生活に必

要なものであり、美しいものや楽しいもの、用途を主とし使いやすいもの、素材の知識や技術・技法、さらに現代の生活方法、文化などを媒介として出来上がって行きます。また「美」という概念を具体化する行為でもあり、現在という社会に生きている一人の人間が、その置かれた状況の中で、何を、どう意識し行動して行くかという問題解決のための行為の一つでもあります。

【デザインの授業】 現在高経附の生徒は、子どもから大人に変わる成長期のなかで独自性を発揮して、デザインを学んでいます。そして、その根源となるものが心、いわゆる体で感じえた知識、意識あるいは思考、概念です。デザイ

ンはデザイナーだけの特権ではなく、高校生でもデザインへと、その可能性を伸ばして行くことが出来るものです。

しかし昨今は、コンピュータや種々の機械が開発され、誰でもが手軽にその機械を操れるようになり、誰でもが出来るデザインに変貌して来ています。それはそれなりに良いことでもあるのですが、最近のデザインを見ていると制作過程の手軽さから、あまり感心することの出来ない方向に向かっている場合も多々あるようです。安易な制作法へと走り、心の道具でもあるデザインが少し軽んじられています。その結果が、オリンピックのエンブレムの騒動になったのではないかと考えています。

デザインを学ぶ初期段階では、安易な制作方法をとらないようにするために、初歩的な技術と、多くの素材（モチーフなど）の取り扱いを習得する必要があります。このことが、現代の安直でめんどうくさがるの若者においては、幅広い問題解決のためのデザインへとつながって行きます。その上でデザインは多くの素材を通し経験を豊かにしていきます。情報化、機械化が進む現代において、素材そのものに直に触れて感じる事の出来る「なま」の部分に対しての経験や理解などの諸問題への対応が、デザインと深くかかわることを忘れてはならないと思います。感じて知ることと、知識として知っていることでは大きな違いがあります。五感を使って知り得たことを知識としてデザインすることは底辺で文化をささえる原動力となりうるものです。日頃から生徒に対して、常に意識して欲しいこととして、デッサンすること、デザインすること、絵を描くこと、塑像を造ること



は、理解することが中心にあり、理解なくしてより良い作品はできないと話しています。ですから高経附では、手仕事を中心に置いた授業が行われています。

今回、ぐんま教育文化フォーラムの方々に見ていただいた授業は、ビジュアルデザイン3年生の色彩構成の最終段階でした。生徒には各自のオリジナリティを表現し、現在生徒たちが持っている力を発揮することを望みました。結果としては、オリジナリティのある確実な力を感じさせる作品が多く出来たのではないかと感じています。

またデザインの仕事は、必ずと言っていいほど締め切りがあり、締め切りに間に合わなければ、いくら良いデザインをしても紙くず同然と言っても過言ではありません。作品のなかには時間の配分が上手く行かず少し物足りなさを感じさせる作品もありましたが、時間を的確に配分し、持っている力を時間内に全て発揮出来るように指導しています。

高経附の3年間では、デザインの基本中の基本を学びます。ゆえに作品の評価を点数で表すことは非常に難しいことです。他人との競争で素晴らしい作品が出来るものでもありません。しかしフィギュアスケートの4回転ジャンプのような特別な人しか出来ない難しいレベルの技術があるわけでもありません。生徒各自がレベルを上げていこうとする試みがあれば、生徒自身も納得のいく作品が出来ることでしょう。日々の積み重ねが成功（素晴らしい作品制作）に繋がっていくのです。これらのことを踏まえ生徒一人一人の自由な表現を引き出すのが、デザインの授業の最も重要な目的です。



彫刻授業は自刻像制作

ビジュアルデザインと同時に展開される彫刻授業では自刻像制作が行われていました。ビジュアルデザインと同様に、来年1月に高崎シティーギャラリーで開催される卒業制作展に向けての習作制作の過程でした。

指導するのは松本聡子先生。取材陣にはいろいろと説明して下さったが、生徒たちにアドバイスすることはほとんどない。生徒たちは黙々と、あるいは楽しそうな会話をしながらそれぞれに指を動かして、粘土を重ねていく。



ある生徒は目だけ、口だけを作っている。さらに部分を作り足して最後は一つの頭部になるのだそうだ。別の生徒の自刻像の頭頂には細長い粘土の塊が載っていました。みなさんそれぞれに独創的なイメージを描いているようです。鏡を見つめながら制作している生徒もいましたが、顔を通りすぎて自分自身を見つめているようでした。



芸術コース美術系作品展・・・高崎駅東口LABI1アートギャラリー

10月12日から18日までの会期で高経附芸術コース美術系1、2年生の作品展が開催されました。高崎駅東口のビルの2回の明るいギャラリースペースに絵画、ビジュアルデザイン、彫刻の力作が展示されていました。いくつかをご紹介します。





取材を終えて

「すなっぷ」で高校の美術授業を取材するのは西邑楽高校に続いて2度目ですが、今回のような「ビジュアルデザイン」や「彫刻」の授業を拝見するのは初めてのことでした。加えて、取材陣は美術好きではありますが素人。授業の内容について評論する力はありません。しかし、生徒の表情や取り組む姿勢を目の当たりにし、アルミ缶の質感やリンゴの皮の輝きや鮮やかな色彩を再現した作品を見た時には、少しだけ芸術の核心に近づいたような気がしました。楽しそうにおしゃべりしながら粘土をこねる姿に接した時には「私たちもこんな授業が受けたかった」と心から羨ましく思いました。

静かに進行する授業の中で豊嶋先生が語った言葉が忘れられません。「大学を出て美術で生活をしていこうとしたとき、何を表現するかを自分で考えなければ必ず行き詰る。借り物の表現では生きていけない。今、その訓練をしなければいけない」と言うのです。生徒たちの姿は、先生の思いに応えようと、必死で自分を見つめる姿だったのだと納得しました。

取材を受け入れて下さった高経附の皆さまに心から感謝します。

《取材・撮影・文責：倉林順一、長塩三枝子、長谷川陽子》